

沼津市 志 山 羽 小 記念館

第11號

1993.10.1

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

Tel(0559)62-0424

「なにとこたへむ」

それほどにうまさかとひとの問ひたらば
なにとこたへむこの酒のあぢ

牧水の歌は歌集が全部で十五巻・歌数七千八百首だが、酒に関する詠唱はその内三百六十余首。五%弱というところだが、この数字はほかの歌人に比べると圧倒的な量である。(北山人抄録・結城日瑠発行・若山牧水「酒の歌」参照)

思えば牧水と酒との関係はほとんど劇的といつてもよく、量質ともに生前から人々の常識を越えていた。沼津千本に居を構えた晩年に近い時でさえ、朝二合、昼二合、晩酌六合を最低の量と決めていたというから、最盛期にはどれだけ飲んだか想像も付かない。没後には真偽取り混ぜたエピソードが加わり、その上酒仙とか酒聖など無責任な呼び方をする人も現れ、ついには幾つものヴェールの下で伝説的な色合いをもった。

掲出の歌は大正六年晩春の作、歌集「白梅集」の掉尾を飾るいわば歌境成熟期の一首である。この歌を揮毫した半切がある。当記念館の「牧水と酒」のコーナーに開館当初から展示され、多くの人を楽しませてきた。

歌の意味は平明直截、世の酒飲みにとつては昔から珠玉の一首とされている。声に出して読み上げてみると、例えば「ナントコタエンコノサケノアジ」というところなど、調べに浮き浮きとし



た弾みがあって、作者自身の酔心地まで朗らかに伝わってくるようだ。

ところで牧水は酒についてどういう考えをもっていたのか。大正十三年の随筆に「酒の讀と苦笑」という短文がある。文章の冒頭に「なにとこたへむ」の歌を掲げ、酒に対する真情を縷々と謳い上げている。しかもどうやらこの一文は歌の中の「どう答えようか」という疑問の答えにもなっているらしいのだ。

それによると、酒は単なる味覚ではなく心の栄養となるもので、飲むほどに「乾いてゐた心はうるほひ、弱つてゐた心は蘇り、散らばつてゐた心は次第に一つに纏つて来る」という。この場合、逆の意味を持つ二つの言語が一つの場の中に向き合っており、酒によつて自分の心がそのどちらかに傾く様を、リアルに分かり易く描いている。レトリックとしても面白くその上響きが美しい。まさに牧水ならではの趣きがあり、読む者を俄然引き込んでしまふ極めて魅惑的な言立てでもある。

しかし、牧水の酒の歌がすべて明るさと軽みによつて人を楽しませたわけではない。生涯の後半に至つては酒のもたらす心身の不調を絶えず訴え続けたし、酒と縁を切るために苦しみ抜いたいきさつは、しばしば歌に詠まれていた。常軌を逸する酒との交歓はやがて悲惨な終末を迎える。「うらかなしはしたためにさへ気をおきて盗み飲む酒とわがなりにけり」の一首、昭和三年春の作だが、死を数カ月後に控えた命の哀切極まりない詠嘆として、忘れはならない歌だと思ふ。

(上田 治史)

初期と晩期と

竹中 皆二

牧水先生にはじめて私がお会いしたのは、大正十五年六月二十四日であった。私は怠けもので日記などはつけていない。それで六月二十四日という日付も、古い『創作』誌をとり出して来て、牧水先生が記された「創作社便」等によつてたしかめた結果である。大正十五年、私は二十四歳全くの青年であった。

古い短歌誌『創作』、大正十五年の七月号「創作社便・牧水生」には次の如く記されている。

翌朝（註・翌二十四日朝）洗面所で顔を洗つてゐるとツイ横の部屋から出て来た背の高い、痩せた青年が何やらわたしの方を見てゐる様な氣勢であつたが、まだ齒も磨き終らぬ横合からいきなり『牧水先生ではないか』と問ひかけた。驚くべし、同じく昨夜鳥聴きに来て泊つて（註・小松屋）ゐたといふ竹中皆二君であつた。

詳細は牧水先生の「梅雨紀行」にある。それから私は先生の御供をして豊川上流の溪谷を電車で遂に終点川合駅まで到り、其処にある只一軒のさびれた旅宿二木屋に一泊した。

「梅雨紀行」最後に近い処を左に抄出、夜、柄にもなく旅愁を覚え、この病身の初対面の友を相手に私は酒を過した。そして終に芸者と名乗る女をも呼んで伊奈節を聞いたり唄うたりした。宿屋の前の往還が信州伊奈に通ずるものであることを聞いて思ひついた事であつたらう。

『先生、いつそ伊奈まで行きませうか』

四五杯の酒に酔うた年若い友はその瘦せた手を挙げて言つた。

牧水先生も木曾節を唄われた。あの朗々たるしかも寂びのある声はまだ老骨（九二）の私の耳に残つてゐる様な気がする。「君酒のガブ呑みは止し給へ」とたしなめられたのははつきり覚えてゐる。牧水先生は終始端座、チビリチビリ酒を味わつて居られた。この二十四日は二木屋に一泊、翌二十五日豊橋に出てそこで御別れした。この先生との奇遇が私の人生行路に与えた影響は大きかつたと云わねばならぬ。私は名古屋の八高生であつた、とは云うものの、長い病氣休学後の復学であつたのだ。病氣は肺炎カタル、つまり肺結核初期、私は近江サナトリウム又遠く九州博多の北、今津療養所にも入院した。

健康恢復したので復学したのであるが、転々の生活でもはや学究の心を失つてゐた。学校を欠席し三河鳳来山麓へ仏法僧聞きに出かけたのであつた。小松屋一泊、翌朝の出合と云うわけであつたのだ。

八高中退、浪々、生家破産、生活行詰り、遂に此処若狭湾入江のほとりに隠栖の形で小店を営み今日に到つてゐるという訳である。

述懐話しはこの位で止めよう。

私の述べたいのは、牧水先生晩年の歌についてである。先生が東京を離れて沼津に移住されたのは大正九年八月十五日であつた。歌集「くろ土」大正九年作中「香貫山」三首あり、その詞書に「八月中旬、東京を引払ひて駿河沼津在なる楊原村香貫山の麓に移住す。歌を詠み始めたは九月半ばなりけむか」がある。正確には、静岡県沼津町在楊原村上香貫折坂であつた。「香貫山」三首の次に「雑詠」十八首あり、第一首に、

○駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣なせる
愛鷹の山

かくの如き荘重なる韻律、名吟があつたのである。○幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

○白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

この、有名すぎる程の有名歌は、勿論初期の作である。処で、牧水先生が沼津に住されてからの歌、これは先生の晩期、純熟の歌であつて、芸術的比重はむしろこの晩期作にある。ところがである、簡単に述べると、牧水初期作品は当時の歌壇を切斷した。然るに晩年作は歌壇から離れて行つたのである。

鹿兒島壽藏氏は、昭和十二年「アララギ」第三十卷第一号に於て次の如く述べてゐる。「実は牧水の良い歌といふのは晩年に現はれて居るやうに私などは思ふのであつて、初期の作品のみを以つて牧水の牧水たることを論じ去られるといふことになる、この作者にとつて残念なことにならう。尚、晩年の作といつても最後の「黒松」は未刊の歌集であるだけ、まだ十分な整理がなされてゐないのであるが、やや平板に過ぎる作品が目著しく云々。初期作品のみに依る歌壇の評価又一般の通説に対する慧眼鹿兒島壽藏氏の警告であつた。晩期作品を二、三首左に、

○愛鷹の根に湧く雲をあした見つゆふべみつ夏のをはりと思ふ
○まるまると馬が寝てをり朝立の酒沸かし急ぐるる
○熟麦のうれとほりたる色深し葉さへ茎さへうち染まりつつ

『山桜の歌』

○黒松

○黒松

竹中 皆二

歌人、福井県小浜市在住。明治三十五年生。牧水の弟子で現在「創作」の選者。

沼津市関係歌集・歌人調査

その目的とお願い

沼津市若山牧水記念館の設立の目的のひとつに、短歌文学の普及を図り：とあります。牧水祭の短歌大会・中学生短歌作品コンクールなど幾つかの行事はこの目的のために計画されて来ましたが、今回、これまでに沼津市関係で発行・発行された歌集を一堂に集めてみたら沼津市の短歌の歴史ともなり、これから短歌を志す方の良い指針にもなると思います、更にできれば特別展としてそれらの展示ができればいいなと考えたりもしているのですがどうでしょうか。

沼津にも、古今の歴史の流れの中で、有名無名の多くの歌詠みたちが、嘗々と日々の哀感を三十一文字にまとめて来ています。しかし、それらは何時か、人々の記憶の中に埋もれて忘れられてしまう訳で、何か口惜しい感じもするのです。それらの短歌作品を全て思い返すのは無理と思いますが、そのほんの一端でも集めることが出来れば幸と考えております。万葉集四三四三に「我る旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむわが妻かなしも」という作品があり、いわゆる東歌の一首で作者は『玉作部広目』とあります。天平勝宝七年（七五五）二月九日に駿河国の防人部領使布勢朝臣主が、大伴家持に二十首の防人歌を献上。家持はその中の十首を万葉集に採択。この玉作部広目の一首はその中の作品です。この詠りの多いしかし訥々と家族を思う作者は沼津の住人と言われております。玉作部は玉類を製造する職業的部民を言い、この人達が居住した地域を玉造と呼

び各地に点在するのですが、駿河郡の玉造郷は現在の沼津市上香貫とされており、広目もこの住人と考えられる訳です。

短歌文学はその後、古今集、新古今集など貴族の文学から、江戸時代には国学者の手に引き継がれ、明治の正岡子規によって復興されていく訳ですが、残念なことにはこの間の沼津における歌人の活動は殆ど伝えられておりません。無いはずはないといろいろ調べてはみたのですが、浅学にして見出すことができませんでした。記録の上で、沼津に短歌が登場するのは、歌集『沼津風』でこの歌集は明治四十年の十月に発行されており、編集は楊原村大字下香貫の大鹽平作氏・発行は三枚橋四一番の平山岩太郎氏。大鹽平作氏は大鹽學道氏か。沼津中学の教師と思える人、後に沼津から離れているようです。平山岩太郎氏は沼津風には作品がありませんが、楨不言舎の作品の中に平山岩太郎氏海岸にアサリの稚貝を撒くにあたって詠めるとあり、漁業関係の方かとも思えます。世に新風を巻き起こすと自負して発行された『沼津風』の作品と作者を紹介しましょう。○砂浜にはつかに萌えし防風はまかぜつむをたのしく少女さひたり 楨不言舎

○楨 豊作：沼津市平町に医院開業
○浜つゝき豆の花さく小軒端に海人津未通女のはたおれる見ゆ (静浦漁村にて) 大鹽學道

(作品に：子供よりつねに遊へるかぬき嶺の高松きられ見えすなりけり：とあり、幼時より沼津に在住されていたことを思わせる人である。)

○桃郷に住居してしゆ桃の実をうましとはみて飽きたらひたり 楨 繁清

(郷里を片浜村と言ひ、不言舎の文中に弟という表

現がある。)
○ぬまつ風日にけに吹けと青柳のもゆる春日はさむけくもなし 横川真古文

○まなはしら学びの子らかふむ霜の杳の跡さへ水る今朝かな 公野利文

○川風のゆるく渡りて花散らふ御垣の上に春日かたふく 間宮黄庭

○歛あらふ川添敷の夕間くれ椿花ちる風はななくして 龜山登野次

○うら庭をめぐらす垣根隈もおちす咲かせむとおもふ金雀花の花 木村玄良

○蓮の根をこしかへしたる荒小田に寒き夕をあさる 木村玄良

○富士の峰を笠雲おほふ彼の雲の下辺を今か人のゆくらむ 徳永無得

○水浅きいさら小川のうらきよく河骨さきて雑魚ゆくも見ゆ 柳本城西

○田子の浦おきつ浪かせさわく日は五位驚むれて低くとひかふ 高橋謙三

○獅子浜の驚頭高山うちかすみ煙たつ見ゆ山やくらしも 木村秀枝

以上の方々の中で沼津出身の方はどなたなのでしょう。教師、官吏などで、たまたま不言舎と行動された方も多いと聞いたことがあります。

大正十四年六月に三島大社の宮司・萩原正平氏の『山桜戸歌集』そのご子息で衆議院議員を務めた萩原正夫氏の『松園歌集』が発行されております。その萩原正夫氏を中心になられてまとめた『伊豆の海(伊豆名歌集)』上中下が知られておりますが、沼津市関係の方が関係されているかどうか定かではありません。『伊豆の海』には多くの古今の歌人の作

品が並びますが、当時の現役の歌人も駿河国・伊豆国・遠江・相模など大まかな住所表示でその出生をさぐるすががなひのです。

若山牧水が沼津に移住したのは大正九年八月十五日。御成橋袂の大橋屋旅館に落ち着いたのは牧水三十六歳の時でした。この時、沼津駅に出迎えたのは創作社の社友神部孝氏。後に牧水が家の新築費用を捻出するために開いた半折展示即売会の世話をした長倉宜一氏（御厨銀行・後沼津市長）も創作社社友。大悟法利雄氏が牧水宅に寄宿するのは大正十二年からでした。当時の創作社社友の沼津在住の歌人達の作品を少し紹介しましょう。

○岬なる蜜柑の山に寒々と夕陽煙らひさざなみの寄る
下香貫 神部 孝

○愛鷹の紅葉散りすぎ色澄める上に簞えし富士のま白さ
東間門 田中 抱星

○かきよせし落葉焼く煙たちこめてこあかときの静かなるかな
神尾 秀子

○淡墨の流れにかかると板橋を蛇の目の傘の一つ行く見ゆ
植松 寿子

○ほかほかとぬくとき浜の砂原に坐りて青き海に親しむ
島本 静子

○春といへど歩む街路の夕寒く埃をたてて風吹き来る
佐野 清次

○箱根路の青葉がぐれに白々と咲き乱れたる山ざくら花
長倉 汀峯（西間門・宜一氏）

他に下香貫の池谷雪江・青山於菟・金沢修二・望月了吉・笹田登美三・山本茂三郎・和田環・七修清美、岡山在住の服部純雄氏などが沼津出身の社友だったようです。まだ他にもいたと思いますが、住所が記入されていないためかではありません。ペン

ネームの使用が多いのも特定できない原因になっています。すこし下がって昭和の始めには田中要吉氏の名も見えます。更に、当時は伊豆田方郡に属した西浦には後に歌誌「浜木綿」を創立した高島友次郎氏が住んでおりました。

○遠方の狩野川べりに立つ煙見つつひたすら君恋ふるなり 高島 富峯（西浦古宇・高島友次郎氏）
牧水の死は昭和三年九月十七日。その後、会は妹の潮みどり、義弟の長谷川銀作氏の手によって発行されました。喜志子氏の指導のもとにその遺風を継いだ井手けい子氏（井手敏彦氏御母堂）が沼津にこられたのは大正十四年でした。

昭和に入って昭和十一年八月、和田傳太郎氏が歌文集『虫聲如雨』を発刊しました。

○一日に一つの瓶よかくばかり水は責き物と知らなく
次いで沼津風の楨 豊作氏が『不言合集第一巻』

を昭和十三年十二月に発行されています。

○山の背に路こそあれしかはあれど登れる人は絶えて見えなく
以後戦争の混乱の中にすべては埋没していく訳です

が、沼津市に於ける短歌活動も目に見えるものは残っていないようです。高島友次郎氏もこの期間は殆ど作品を発表しておりません。

戦後でまず記録したいのは昭和二十二年ごろの沼津中学校（現東高）の校内文芸誌「鬼の詞」の第六号に流星と題する大岡信氏の短歌作品が載っていることでしょう。二三を紹介致します。

○真屋野の山田の畔をひとりゆけば青き麦萌ゆいのちひた燃ゆ

○さむざむと橋の上に吹く風痛し折りしもあれや流

れ星墜つる

戦後の沼津市の短歌を語るるとき先ず挙げられるのは積 惟勝氏でしょう。東京の小学校教師を辞職して、沼津の我入道の養護学校に赴任した氏は、戦後戦災孤児養育施設松風荘で恵まれない子ども達を養育するかわら、地域の文学運動の推進に尽力されたのです。昭和二十三年に当時の沼津市長長倉宜一氏と協力して牧水祭をおこなったことは牧水会会報「幾山河」第二号にも記録されています。同時に短歌愛好家を結集して愛好短歌会を結成。その後の沼津市に於ける短歌の推進者の殆どは伊藤祐輔氏をはじめここに集ったようです。

愛好短歌は沼津歌人と名を変え、更に東海短歌会と発展していきますが、昭和二十九年の一月に伊藤祐輔氏が山脈誌を創刊、井手けい子氏もここに参加しておりしました。あららぎの稲葉公平氏の名も二号には見えております。稲葉公平氏は松崎の出で、戦後沼津千本に住み、静岡あららぎの選者として大きな足跡を残されました。あららぎと言えば落合京太郎氏も沼津にしばらくおられたと聞いております。

戦後第一号の歌集は長谷川茂正氏の『光る霧』で昭和二十九年に発行されています。次いで東海短歌会の合同歌集『十字路』昭和三十年。山脈叢書第一集（合同歌集）三十一年と刊行されていく訳です。

戦前・戦中の短歌の沼津市の歴史を概括した訳ですが、資料の少なさからほんの一角に触れただけのような気がしています。この間の短歌・短歌作者についてどのような資料でも結構ですので、ございましたら是非教えてくださるようお願いしたいと思います。宜しくお願い致します。

（須永秀生）